

鹿児島県立川内高等学校

# 校長通信

第1号 (令和8年4月7日/校長 大倉秀心)



校訓「自律 敬愛 剛健」

鹿児島県薩摩川内市御陵下町6番3号



電話 (0996) 23-7274

FAX (0996) 22-1542



## 『校長通信』をお届けします

令和8年度が始まりました。今年度校長として着任いたしました大倉です。生徒・保護者等を対象に、学校教育に関することや折々の校長室の話題を中心に『校長通信』をお届けしたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

『校長通信』の他に各式辞・講話等を、本校ホームページに掲載していきます。

[検索ルート] 川内高等学校Top>「校長室から」>「校長通信」

## 年度当初にあたり

本校では今年度、「変化の激しい未来をしなやかに生き抜く力を持った生徒を育成する」ことを重点目標に掲げ、「授業で勝負」を合言葉に主体的な学びを推進し、学習指導と学習評価の改善に取り組んでいきます。

この教育効果を最大限に引き出すために、年度当初において、私は次の二点を生徒の皆さんに訴えました。

「脳に汗をかけ」

「自分のルーツに誇りを持て」

一番目については、体を動かせば汗が出てくるように、脳に思いっきり汗をかかすくらい、じっくりと深く考える時間を高校生として日常から持ってほしいということです。日々の学習はもちろん、探究活動や自分の将来について考える進路学習においても、必要に迫られてやっつけ仕事で片付けるような学習をするのではなく、各学年で「今」やらねばならないその時にしっかりと「脳に汗をかいて」ほしいということです。

二番目については読んで字の如く、「川薩地域にルーツを持つ自分に誇りを持て」ということです。「ルーツ」とは、自分や祖先が生まれ育った土地に対する感情的な結びつき、心の拠り所みたいな感覚といってもいいでしょう。この単語のもともとの意味は植物の「根っこ」ですから、生徒の皆さんが本校を卒業して地元を離れた後、どこで生活をするようになっても、「根っこ」は川薩地域にあるという意識を常に持つ大

人に成長してほしいということなのです。都市一極集中、鹿児島でいえば鹿児島市に人や物が集中する一方で、地方の過疎化・人手不足という問題も顕在化しています。しかし、負の側面に目が向きがちになる中で、最近「地域創生」の分野に進もうとする若者も増えていることも事実です。地域に残る文化や歴史をもう一度掘り起こし、それらをその地域にしかない自然や風土とともに次世代に伝えていこうとしているのです。そういう観点から見ると、本校があるこの川薩地域にもたくさんの魅力が埋もれているはずで、それらの魅力をこの地域で生活する生徒の皆さんがしっかりと認識し、川内高校生だからできること、川内高校生にしかできないことを前のめりの姿勢でとことん追究して他の地域の高校生との差別化を図り、自分たちの存在価値・魅力を一層高めてほしいのです。

## いい学校とは

私は今年度で教師生活36年目を迎えています。甲南高校(4年)、加世田高校(8年)、大島高校(5年)、鶴丸高校(10年)、伊集院高校(2年)、喜界高校(2年・教頭)、玉龍高校(2年・教頭)、与論高校(2年・校長)で勤務してきました。どの学校も本当にいい学校でした。しかし、一口に「いい学校」といってもその定義は人それぞれかもしれません。普通科の高校で大学等の上級学校への進学を希望する生徒が大部分を占めていることを考えると、「自分を次のステージに立たせるために生徒が日々学業を怠らず、それを教員が全力でサポートし、生徒が希望進路を実現し満足して卒業していく学校」と私なりには定義しています。そして、転勤のたびに、着任したときよりもそのような生徒を一人でも多くし、「より一層いい学校」にして転勤していくことが自分の責務だと言い聞かせてきました。この中で、どの学校でも共通して言えることが一つ分かりました。それは、

「結局、努力した生徒が望みを叶え、手を抜いた生徒・サボった生徒は苦杯をなめる」

という単純な事実です。このことは、川内高校でも同

じであることを疑っておりません。「A高校に進学すれば将来は安泰」とか、「B高校に進学したら大学進学は絶望的」なんてことは一切ないということです。どんな学校であろうと努力は必要で、その努力相応の結果しか自分には帰って来ないということです。うまくいかなかった生徒が、その結果を学校や周りの環境のせいにするのも、残念ですが共通している傾向です。そう考えているうちは絶対にその生徒は伸びません。「自分に努力が足りなかった」という事実を受け入れて初めて、その生徒は成長の第一歩を踏み出すことになります。以上のことから学校に優劣はないということがわかんと思います。生徒が自分自身を輝かすために日々努力を続け、それを教師が全力でサポートしている。そういう生徒の数の多さが「いい学校」の一つの指標なのです。

### 進学するということ

1年生は今後、文理選択等の進路学習を通して、自分の関心や適性についてじっくりと考えていくことになると思います。将来の職業をイメージして、そこから逆算して学部・学科を決め、大学を絞り込んでいくことは一つの進路学習です。しかし、大学に行く真の目的は、単に職業に就くことだけではないということも覚えておいてほしいと思います。既に希望する職業が決まっているという人も、普通科の高校に在籍して幅広い分野で学習する自分に、何か他に適性はないかを改めて考える時間は持ってほしいと思います。

本来、大学という場所は専門学校等とは違い、職業選択に直結するような場所ではありません。もちろん、医学部医学科を出れば医師、教育学部英語専攻を出れば英語の先生というように、一部わかり易い学部学科もありますが、経済学部や人文学部、工学部や理学部を出たからといって、具体的にある職業に就くことを入学前に明確に想像できる人はいないと思います。

ここに面白い言葉があります。

「あの大学はいい大学なんだよな。だってあそこを出ただけでは何にもならないんだから。」

これは第二次世界大戦中及び戦後、近衛文麿首相のブレーンとして、その後の吉田茂首相の側近として日本の政財界を支えた白洲次郎氏が、長男の東京藝術大学合格の際に語ったと言われる言葉です。

芸術の世界は大学を出ていようがいまいが、本人の努力とセンスがなければどうにもならない世界です。自分の専門で抜きん出るには相当の覚悟と苦難が伴うという意味の他に、自分の専門を学ぶ際の物の見方を通して、如何に自分を世の中で輝かせることができるかを考え抜いて行動に移すことができれば、将来大成できるのだと解釈することもできるのではないのでしょうか。

藝大を卒業しただけで芸術家になって将来の見通しがつくわけではありません。芸術というフレームを通して社会に対し常にアンテナを張り、自分の専門を深めながら将来、社会でどのような貢献ができるかを考えなければならない。このことは、他の大学・学部・学科でも当然必要な姿勢なのではないかと思います。結果、将来どんな職業に就くのかは後にならないとわからないのです。後にこの長男は東宝東和(映画会社)の社長にまで登りつめます。ちなみに、白洲次郎氏本人が英国ケンブリッジ大学で専攻したのは西洋中世史だったそうです。歴史を研究しながら、まさか将来、自分が首相の側近として働く姿を明確に想像していたはずはないと思います。

とかく、将来自分の役に立つと思われることだけを効率よく、無駄を極限までそぎ落として勉強することが賢い学び方だという風潮が強い世の中になってしまいました。残念でなりません。このような発想をする人は、一見、無駄と思われるものの中に新たな気づきや発見、感動があるということを知ることができません。高校で学ぶ対象も結局は同じことです。これらが将来何の役に立つのかは、結局、後にならないとわからないのです。だからこそ、どの教科のどの授業も真摯な姿勢で学び、探究活動などで点と点を結びつけていく学びが求められるのです。この川内高校が提供するものを、選り好みをせず学んでいくことに楽しみを見出せるようになれば、皆さんの将来もプラスの方向に向かうことは間違いないでしょう。そういう姿はこれから高校生になる川薩地域に住む後輩たちへの川内高校の魅力発信にもつながるのです。

校長として、皆さんに自信を持って次の言葉を贈りたいと思います。

「川内高校はいい高校なんだよな。だってここを出ただけでは何にもならないんだから。」